

星めぐりの歌

あかいめだまのさそり

ひろげた鷺のつばさ

あをいめだまの小さいぬ

ひかりのへびのとぐろ

オリオンは高くうたひ

つゆとしもとをおとす

アンドロメダのくもは

さかなのくちのかたち

大ぐまのあしをきたに

五つのばしたところ

小熊のひたひのうへは

そらのめぐりのめあて

種山ヶ原

春はまだきの朱雲^{あけ}を

アルペン農の汗に燃し

繩と菩提樹皮^{マダカ}にうちよそひ

風とひかりにちかひせり

四月は風のかぐはしく

雲かけ原を超えくれば

雪融けの草をわたる

繞る八谷の劈櫛の

いしぶみしげきおのづから

種山ヶ原に燃ゆる火の

なかばは雲に鎖さるゝ

四月は風のかぐはしく

雲かけ原を超えくれば

雪融けの草をわたる

ポランの広場

つめくさの花の咲く晩に

ポランの広場の夏まつり

ポランの広場の夏まつり

酒を吞まずに水を吞む

そんなやつらがでかけて来ると

ポランの広場も朝になる

ポランの広場も白っぽくなる

つめくさの花の咲く晩に

ポランの広場の夏まつり

ポランの広場の夏まつり

酒くせのわるい山猫が

黄いろのシャツで出かけてくると

ポランの広場に雨がふる

ポランの広場に雨が落ちる

花巻農学校精神歌

日ハ君臨シ カガヤキハ

白金ノアメ ソソギタリ

ワレラハ黒キ ツチニ俯シ

マコトノクサノ タネマケリ

日ハ君臨シ 穹窿ニ

ミナギリワタス 青ビカリ

ヒカリノアセヲ 感ズレバ

気圏ノキハミ 隈モナシ

日ハ君臨シ 玻璃ノマド

清澄ニシテ 寂カナリ

サアレマコトヲ 索メテハ

白堊ノ霧モ アビヌベシ

日ハ君臨シ カガヤキノ

太陽系ハ マヒルナリ

ケハシキタビノ ナカニシテ

ワレラヒカリノ ミチヲフム

火の島の歌

耕母黄昏

海鳴りのとどろく日は

風たちて樹立さわぎ

郵船ふねもより来ぬを

鳥とびてくれぬ

火の山の燃え熾りて

子らよ待たん いざかへり

雲くもの流るゝ

夕餉たきてやすらはん

海鳴りよせ来る椿のはやしに

ひねもす百合ゆり掘り

風たちて穂麦さわぎ

今日もはてぬ

雲とびてくれぬ

子らよ待たん いざかへり

夕餉たきていこひなん

「稲作挿話」

あすこの田はねえ

あの種類では窒素があんまり多過ぎるから
もうきっぱりと灌水（みず）をきってね
三番除草はしないんだ

……一しんに畔を走って来て

青田のなかに汗拭くその子……

磷酸がまだ残っていない？

みんな使った？

それではもしもこの天候が

これから五日続いたら

あのしだれ葉をねえ

こういう風なしだれ葉をねえ

むしってとってしまうんだ

……せわしくうなづき汗拭くその子

冬講習に来たときは

一年はたらいたあとは云へ

まだかがやかな林檎のわらいをもっていた

いまはもう日と汗に焼け

幾夜の不眠にやつれている……

それからいいかい

今月末にあの稲が

君の胸より延びたらねえ

ちやうどこのシャツの上のボタンを定規にしてねえ

葉先を刈ってしまうんだ

……汗だけでない

涙も拭いているんだな……

君が自分でかんがえた

あの田もすっかり見てきたよ

陸羽百三十二号のほうね

あれはずいぶん上手に行った

肥えも少しもむらがないし

いかにも強く育っている

硫安だつてきみが自分で播いたろう

みんながいろいろ云うだろうが

あつちは少しも心配ない

反当三石二斗なら

もう決まったと云つていい

しっかりやるんだよ

これからの本当の勉強はねえ

テニスをしながら商売の先生から

義理で教わることでないんだ

きみのようにさ　吹雪やわづかの仕事のひまで

泣きながら　からだに刻んでゆく勉強が

まもなくぐんぐん強い芽を噴いて

どこまでのびるかわからない

それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ

ではさようなら

……雲からも風からも

透明な力が

そのこどもに

うつれ……

(出典『土に叫ぶ人 松田甚次郎』より)